初めての寄稿

水田　紀久

学校を出てから二十年あまり、公立高校で教育の現場にいたわたくしが、昭和四十八年、四十歳代の半ばで関西大学の国文学科に迎えられて、まず驚いたのは研究論文の発表機関が潤沢なことであった。潤沢とは妙な言い方だが、紀要ひとつ無かったこれまでの奉職先では、全国学会の機関誌が唯一の発表場所に限られていた。老先生や先輩の方々は、ご自分たちの若い頃に較べ、格段に増えた発表機関はかえって易きに流れるもとになると危惧される向きがあったが、やはり学徒にとって、それは仕合わせでありがたいことだったのは言うまでもない。

只今でもそうであろうが、関大では国文学会の『国文学』をはじめ、関大文学会の『文学論集』、さらに東西学術研究所や泊園記念会にもそれぞれ『紀要』その他、また『泊園』という機関誌があって、研究員を兼ねればそれらのいずれにも寄稿ができた。いま、『国文学』一〇〇号に寄せる小文を徴せられ、はしなくもわたくしは、まだ専任に就任以前に、やはり国文学会の依頼で本誌に寄せた最初の蕪稿のことを想い出した。それは国語学や国文学関係の論考ではなく、同じ文学部史学科の大庭脩教授の編著に対する書評で、東西研の研究叢刊の嚆矢『江戸時代における唐船持渡書の研究』という、索引を合わせれば八〇〇頁を超える哀然たる大著であった。のちに教授はこの研究を大成され、昭和六十一年第七十一回日本学士院賞を受けられた。

さて、懸命にまとめた拙評は、国文学会の都合で掲載が予定より一号遅れ、昭和四十二年暮に発行の42号にやっと収められたが、この蕪稿の受領挨拶状、それはまだ七円の郵便はがき（消印42・4・19）の一葉を、いまもわたくしは大切に保管している。文中、「期日より前に、お心のこもった見事な内容の、しかも割りつけ指定にあたっては感謝にたえませぬほどの整然たる御稿を頂戴し」云々と、多分編集担当だった、今は亡き谷沢永一さんが薄いインクでしたためた一節は、まだ高校教師だったわたくしにとって、うれしい過褒のことばであった。と同時に、九十近いこの年齢になるまで、依頼原稿の執筆を承諾した限りは、常に心懸けるべき戒めと励ましの金言に昇華していたのである。

郵便往復はがき
往信

豊中市本町九丁目33

水田紀久様

吹田市千里山
関西大学国文学研究室

前略御免下さい、
大庭俊氏の新著「江戸時代における唐船持渡書の研究」の書評を、関西大学国文学会発行の雑誌「国文学」の第41号に、御寄稿いただきたく、突然にて失礼ながら、お願い申しあげます。枚数は、四百字詰十枚以上、御随意に必要な分量だけ、十分にお使い下さい。〆切りは、4月15日、という要領でございますが、恐縮ながら、稿料をさしあげ得ませぬことを予にお許し下さい。時節柄御多忙中のところ申し訳なくなどまるすが、なにとぞおひき受け下さいますよう、お願い申しあげます。

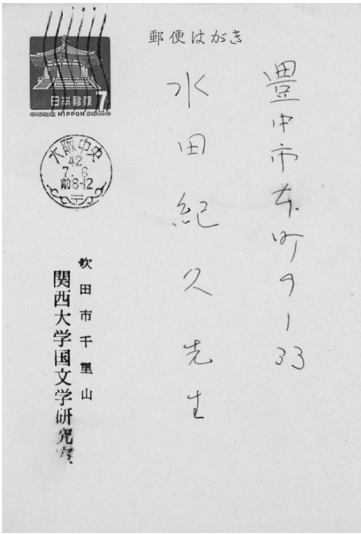
郵便はがき

豊中市本町9-33

水田紀久様

吹田市千里山
関西大学国文学研究室

御稿拝受致しました。編集担当の私が十数日まで登校致しませんだため、お礼申しあげるのがおくれまして申し訳ございません。期日より前に、お心のこもった見事なお答の、しかも割りつけ指定にあたっては感謝にたえませぬほどの整然たる御稿を頂戴し、まったく恐縮のソたりでございます。重ね御礼申しあげます。御面倒ながら、念を入れる意味で初校をお目にかけますゆえ、ようしくお願い申しあげます。



郵便はがき

豊中市東ケ丘1-33

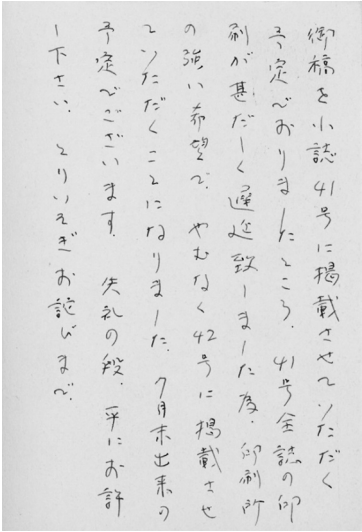
水田紀久先生

日本郵便 NIPPON YUBIN 7

大阪中央 42.6.7 前8-12

吹田市千里山

関西大学国文学研究室



御稿を小誌41号に掲載させていただく予定でおりましたところ、41号全誌の印刷が甚だしく遅延致しました為、印刷所の強い希望で、やむなく42号に掲載させていただくことになりました。7月末出来の予定でございます。失礼の段、平にお許し下さい。とりいそぎお詫びまで。

（みずた　のりひさ／本学元教授）